

---

# これが俺の生きる道！

冬雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

これが俺の生きる道！

### 【Nコード】

N2466D

### 【作者名】

冬雪

### 【あらすじ】

「正しいことを」。自分の信念をただひたすらに貫く少年と、一つ年下の幼なじみや天然天才クラスメイトを始めとした愉快な仲間たちが織り成す、ありきたりなラブコメディ。一日一回更新予定。

## プロローグ

「……ちくしょう」

いなむら まさし  
稲村雅史は、切れた唇の痛みを感じつつ、小さく呟いた。場所は人気のない裏路地。先程までの喧騒はどこへやら、人どころか迷い猫一匹通らない。

雅史は、掃除などされたことのないアスファルトに大の字に寝転がっている。無論、睡眠が目的ではない。単に、殴打されながら酷使した足腰が命令を受け付けなかったのだ。

強い光を宿した精悍な顔つきから連想出来る通り、彼は荒事をむしろ得手とする部類の人間である。だが、さすがに五人を同時に相手にするのは無謀だった。三人と差し違えただけでも健闘したと言っているだろう。

雅史は、立ち上がろうともせずに忌々しいほど晴れ渡った青空をぼんやりと眺めている。その表情に、不思議と後悔の色は浮かんでいない。

固化化した時が過ぎていく。生命が芽生える季節の穏やかな風も、すえた匂いのするこの袋小路には届かない。

と。打ち捨てられた人形のように動かない雅史に近づくと、一つの影があった。

「……バカだよ」

「……美沙か」

雅史と上と下で見つめ合うす形で佇む影の主、いわさわ みさ  
岩沢美沙は、自身が痛みを感じているように眉をひそめた。

「バカだよ、雅史は。これで何回目？」

「さあな。忘れた、とつくに」

目を逸らさずに、雅史は淡々と答える。

「全然関係ない人のために、そんなに傷ついて。それで助けた人が、雅史に何をしてくれるの？」

「別に。ああ、五回に一回くらい、礼がもらえる」

「ーだから！　なんで雅史は、それで、たったそれだけのために、こんなこと続けてるの、って言ってるの！」

それは、怒号というよりは悲鳴に近かった。涙を瞳に溜め込んだ美沙は、感情の高揚を体现するかのように、肩を上下させる。

「泣くなよ。……俺が泣かせたみたいだ」

「っ、バカ！　みたい、じゃないんだから！」

とうとう、美沙の悲しみは堰を切って溢れ出した。晴天の下、雅史は温かい雨を数滴、その頬に浴びる。

何度目がわからない、正解のない押し問答。

だからこそ雅史は、一度たりとも揺らぐことなく、一度たりとも譲ることなく、

「……ごめん。それでも、俺はー」

己の信じる道を、宣誓のように口にした。

## プロローグ（後書き）

この物語はありきたりなラブコメディです。そうでないカオスな刺激をお求めの方は、

「終わり始まる物語」のほうを……って別の作品紹介してどうする自分。

まあとにかく、この作品ではベタを突っ走りたいと思います。目標は一日一回更新です。

## 第一話

「もう、信じらんないっ……!」

翌日。

美沙は、朝から機嫌が常のそれではなかった。無意識の内に早歩きしている自身にさえ気づいていない。荒々しい歩調に合わせて、ショートカットの髪が揺れる。そのため、

「ちよつとちよつとミサつてば、速いよ〜!」

美沙といつも登校を共にしている、松原瑞希は、小走りで追いついては離され、追いついてはまた離され……を繰り返していた。

「あ、ご、ごめんなさい!」

校門のすぐ手前にある赤信号で、二人は並んで立ち止まる。ただし、瑞希は膝に手について息を切らしている。

「はあ……はあ」

「み、瑞希先輩、大丈夫ですか……?」

美沙は高校一年生、瑞希は二年である（ちなみに、雅史も二年だ）。が、身長はほぼ同じか、むしろ美沙の方がわずかに高いほどである。別に、美沙が飛び抜けて長身なわけではない。

「じゃないかも。……でさ〜、どしたのミサ? 今日」

「ふえっ? な、何がですか?」

「競歩の大会にでも出るの?」

「え……そんな予定は、ないですけど」

「あれ?」

「へ?」

重ねて言うが、美沙は自分がいかなるスピードで駅から校門前まで踏破したのか認識していない。後の噂だが、このとき彼女に追い抜かれた陸上部生徒は「これが世界の壁か……」と呟いたとか何とか。

「……まいっか。ところでさ、今日ってなんか小テストあったっけ

？」

「あの……先輩とはクラスっていうか、学年が違うんですけど……」

「あ、思い出した古文が単語テストだっけ！？あゝでもあたしアイツ大嫌いだからいいや」

「……そーゆー問題なんですか？」

通学路にある中で最も学校に近いこの信号は、何故か待ち時間が長い。そのため、これのせいで始業時間に間に合わず、遅刻になる生徒が少なくなく、通称「魔の赤信号」とよばれている。

「わ、青になつてる！いいこいこ！」

しかもこのように、待ち時間に話し込んでしまうせいで信号が青であるのに見逃してしまう場合も多々ある。こちらは通称「ルージ・ブルー」。存在感がない、の意である。

ともあれ、桜がまだまだ咲き誇る季節。

未来を夢見る少年少女たちの、変わり映えがないようで同じ日など一日たりともない日常が、今日もまた始まった。

彼女らが通う私立鶴ヶ丘高等学校は、来年で創立五十周年を迎える歴史ある進学校である。生徒総数は約千二百、施設も冷暖房完備、天井付き温水プール、食堂には自動販売機、などなど、なかなか設備が整っている。

「……だからって、皆が充実した学校生活を送ってるとは限らないワケで」

遙か昔に読んだこの学校のパンフレット、その内容をぼんやりと思い返しながら、雅史はひとりごちた。彼の席は窓際にあるので、校庭で体育を行っている他クラスの様子を眺めることが出来る。ちなみに、雅史の学年は、今学期はサッカー。

（つと、授業授業）

教科書をなぞるだけの単調な日本史の授業に、クラスの大半の生徒は意欲を失い気味で、何人かは内職しているが、雅史は集中を取り戻した。昨日の乱闘でこしらえた無数の傷の痛みが、丁度よい目

覚ましとなっている。そんな彼のノートには、決して上手くはないが丁寧な文字が几帳面に並んでいる。

「うつわ、相変わらずバカみたいに綺麗な字。マサシ、ホントに男の子？」

雅史の隣の席に座る、そもそも教科書を机の上に出してさえいないクラスメイト、瑞希は顎を机に乗せ、両腕を前に投げ出してダレている。どうみても教師に注意されて然るべき授業態度だが、言動とは裏腹に、瑞希は成績が常に学年で三本の指に入る超優等生で、おまけに短気で気まぐれなので、下手に刺激しない方が懸命だ、というのが教師間の暗黙の了解だった。

「この顔で女だったらシャレにならんだろが」

目は黒板に向けたまま答え、雅史は内心でため息をついた。何を隠そう、瑞希はルックスまで学年トップクラス。女子にそれほど免疫のない雅史にとって、彼女と面と向かって会話するのはなかなかの難題なのだ。

「あ、差別反対。マサシ、アンタは今全国のあたしを敵に回しました」

（お前は不細工じゃないだろがっ！）

とは雅史を始め周囲の男子生徒魂の叫び。

「……そういう意味じゃない。言葉の綾だ」

「じゃ、どーゆー意味よ」

「あーだからだな、つまり、」

「ところでさー」

雅史の逡巡する態度に、というか話題自体に飽きたのか、瑞希は猫のように伸びをし、ついで欠伸を一つ盛大にもらった。

「な、何だよ？」

「アンタ、ミサになんかした？」

「……っ！？」

雅史は、危うく消しゴムを手から滑り落とすところだった。動揺を隠すため、文字に埋まった黒板をより一層凝視する。質問に他意



がないだけに、返答が難しい。下手にとぼけると、瑞希は悪意なく理性的に反論してくるのを、雅史は経験から学んでいた。

「……俺は、あいつに何もしてない。あっちが勝手に気にしてるだけだ」

「嬉しいクセに」

「はあ！？ な、なんでそんな話になるんだよ！ つつーか何があったのかも知らないのに！」

「ケンカしたんでしょ？」

手を口に添えて二度目の欠伸を隠しつつ、当然のように瑞希は言った。

「な……」

「顔にアザついてるし。あ、でもミサとやったんじゃないくて、また正義の味方ごっこした結果とみた」

うつりうつり、と雅史の頬の青アザをつつく瑞希。

「痛いって」

その指を払い、いつの間にかまだ写していない板書が消されていたことに気づいた雅史は、もう一度ため息をつき、椅子に深く腰掛けた。

「……大筋は否定しない。別に、正義を気取ってるつもりはないけど」

「だよね。正義の味方は負けないし」

「……悪かったな」

「悪くないよ」

「は？」

瑞希の声色が変わった気がして、雅史はこの授業中初めて彼女の顔をみた。そこに、

「あたしは好きだよ、そーゆーの」

不意打ちの、一片の不純もない満面の笑顔があつた。

「――」

雅史の卑屈な感情や、渦巻いていた諸々の思考は、一瞬で吹き飛ばされた。代わりに、鍋で茹で揚げられているように、体温の上昇と顔の紅潮を感じる。

「？ どしたの、固まっちゃって」

にらめっこの練習？と尋ねる瑞希は、無論自身の容姿の破壊力を理解していない。

「な、なんでもないっ！」

耐えられなくなつて雅史が立ち上がると同時に、タイミングよくチャイムが鳴った。余談だが、二人の会話はクラス中に聴こえているが、もう皆慣れっこなのでいちいち気にする者はいなかった。

昼休み。授業という呪縛から解き放たれた生徒達は、嬉々として散開していく。

「……」

そんな中、雅史の足取りは鈍かった。いつもなら迷わず屋上のベロンチに向かうのだが、そうすると、必然的に美沙と遭遇する羽目になるからだ。いや、遭遇というのは少し語弊がある。確かに確たる約束こそ交わしていないものの、雅史が食堂でも教室でもなく、人の少ない屋上で昼食をとるようになったのは今年の春。つまり美沙が入学してからであり、その符号は決して偶然ではないのだから。

「ひははいほ（行かないの）？」

コンビニで買ったパンを持ったままぼんやりしている雅史に、おにぎりを豪快に口を含んだまま瑞希は声をかける。口元が膨らんでいて、ハムスターのようだ、と雅史は思った。

「……とりあえず、食べるか喋るかどっちかにしてくれ」

「……」

何を思ったのか、瑞希はおにぎり（昆布）を置くと、しゅばばば、

と高速で両手を動かした。

「……？なんだ、手話か、それ？」

こくこく。首肯二回による肯定。

「いや、わからんし」

残念ながら、あるいは当然ながら、瑞希の意志は一ミリたりとも伝わらなかった。もつとも、手話を知るものが見たとしてもあのスピードでは捉えきれなかっただろうが。

「ーんぐつ。いいじゃん、行ってくれば」

「やっと食べ終わったか。……そう簡単にいったら苦労しないんだよ」

雅史と美沙は一つ違いだが、幼なじみである。幼かった彼らにとつてあまり意味を成さず、幼稚園から小学校まではなんの気兼ねなく手を取り合って遊んでいた。

「後回しにしてるともつと会にくくなるによ？」

「……わかつてるよ」

雅史は、内心の葛藤を表すかのように頭を三度掻いた。それから、深くゆつくりと息を吐き出す。

「ん。いい顔になったね」

「母親か、お前は。とにかく、……そうだな。ここで逃げるのは、」

「正しくない」

雅史のお決まりの言葉に、瑞希が合わせる。数秒間を置いて、二人は同時に笑い出した。

数分後、雅史はいつもより心なしか重く感じる屋上の扉を開けた。清涼感のある柔らかな風が、頬をくすぐって駆け抜けて行った。

「……よ、美沙」

雅史は、平静を装って目的の人物、美沙に近づく。美沙は、目を丸くして、フォークでうさぎ型のりんごを刺したまま固まっている。

「……先輩。来たんですね」

ややあって、美沙はわざと敬語を用いて応対した。が、言葉の節

々から感じられる棘は、どう解釈しても敬意を伴っていない。

「別に、どこで食おうが俺の自由だろ？」

躊躇うことなく、いや、躊躇いが生まれる前に、雅史は美沙の隣に座った。

（……座ったのはいいけど。何話せばいいんだ？）

雅史は、意味もなく周囲を見渡す。他のベンチにも何組かの男女ペアがいたが、彼らとは違いみな話が大いに盛り上がっている。

「……傷は治ったの？」

不意に。

独り言のように、雅史が注意していなければ聞き取れなかっただろう声量で、美沙は呟いた。

「ぼちぼち」

「痛くない？」

「まあ、慣れっこだし」

「何回目だつて、痛いのは痛いに決まってるでしょ！」

「……ま、な。でも、間違ってるのを見過ごす方が、もっと嫌だ」

気負うでもなく、雅史は平然と言い放った。美沙は、強く唇を噛む。

「バカ」

「もう聞いた」

「大バカ！」

「……それは初耳」

「……はあ。なんであたし、こんなのを……」

言いかけて、美沙は何か急に急かされるように慌ててりんごを口に含む。

「なんだって？」

「……………」

雅史の問いに、しゃくしゃく、と小気味よい音だけが返ってきた。  
「……そうだったな」

そこでようやく、雅史は昼食の存在を思い出した。恐らく美沙の

反応は、一緒に昼休みを過ごすことを許可してくれたんだろう、と判断し、パンの包みをやや強引に破った。

雅史と美沙の関係に変化が訪れたのは、雅史が中学生になってからである。次第に異性に対する異性としての興味が強まる年頃。だが、その点について雅史はさほど関心を示さなかった（このことが後々尾を引くのだが、当時の彼は知る由もない）。むしろ問題だったのは、如実に表れた身体能力の差、である。

（……あんなに大きいんだもん）

美沙は、パンを持つ雅史の無骨な皮の厚い右手をそつと見つめる。それから、自分の小さく柔らかな手をぎゅ、と握った。

二人の間で、喧嘩は少なくなかった。そして、弁論力などさして変わらない口喧嘩は、度々肉弾戦に発展した。

初めの内は、むしろ美沙に分があつた。彼女はとある理由から、日頃から危機への対応力を鍛えられる場面に恵まれていたからだ。だが、小学校中学年を過ぎた辺りから、大勢は徐々に逆転して行った。今では、戦いにすらならないだろう。

（……あたしが、男だったらな……）

そうすれば、なんの迷いもなく雅史と肩を並べて笑えるのに――そう思ったことは、一度や二度ではない。だが、論ずるまでもなくそれは叶わぬ夢想でしかない。

「――美沙？」

「ふふえっ!？」

美沙が気づいたとき、既に昼食を食べ終え、ベンチから立ち上がった雅史が、彼女を見つめていた。強くも優しくもある、ずっと前から知っている、吸い込まれるような瞳。

「チャイム、鳴ったぞ？」

「あ……そ、そう。じゃなかった、知ってるわよ」

「いや、知ってるのは知ってるけど」

「じゃ、何よ!」

「いやいやいや。だから、授業始まるって」  
「！」

「お帰りー」  
「……おう」

雅史が教室に戻るのを見て、すっかり五時限目の準備を終えた瑞希はひらひら手を振った。と言っても、机に乗っているのは持参の安眠枕だが。

「寝る気まんまんじゃねーか！」  
「何をいまさらちゃん」

「次、小テストだぞ？古文の」  
「だいじょーぶだいじょーぶ、あんなの寝てても解けるから」  
「……………」

雅史にとって非常に腹立たしいことに、それは、笑い飛ばせない事実だった。一体どんな仕組みになっているのか、瑞希は一度問題用紙と解答用紙をざっと眺めれば、文字通り目をつぶって解くことが出来る。

（天才って、こいつみたいな人間のことなんだろうな……）  
ここまで突き抜けてくれると、いつそ嫉妬する余地さえなくむしろ清々しい。そんなことを考えながら、雅史は席に着いて古文単語帳をざっと見直す。一応、昨日予習はしてあるので、他のことに意識を割かない限り問題なさそうだった。やはり昼休みの内に美沙と会っておいて正解だった、と雅史は心中で頷いた。実際、悪くない手応えだった。

## 第二話

放課後になった。

「……松原（瑞希の名字）。終わったぞ、授業」

「うにゅ、もうお通夜は飽きたってば……」

瑞希は、安眠枕を抱いて幸せそうに眠っている。五時限目の始めにあった小テストからホームルームが終わった今まで、瑞希は外部からのいかなる干渉も受け付けなかった。いわゆる熟睡、あるいは爆睡である。

（お通夜って……どんな夢だ、そりゃ）

身内が連続して不幸に遭う夢でも視たのか。いやしかし飽きたと切り捨てる程度の軽さなら、それほど縁のない親戚かー

（つてアホらしい。たかが夢に、何真面目になってるんだ、俺は）

自分の融通の利かなさを苦笑して、雅史は頭を掻いた。

「ま、別に何があるワケでもないし。放置しとくか」

瑞希も雅史も、そして美沙も部活には所属していない。故に三人で下校することが多いのだが、その際に周囲から放たれてくる無数の殺気に、雅史は辟易としていた。美沙と二人ならまだそれほどはない。かといって、美沙が不美人なのかといえば、少なくとも雅史は決してそう思っていないし、全校生徒にアンケートを採れば過半数は同じ回答を書くだろう。

「それじゃ、な」

安眠を妨げぬよう小声で別れを告げ、雅史は足早に校門を目指した。

「遅いです！」

急いで待ち合わせ場所にやってきた雅史を迎えたのは、頬をふくらせた美沙の罵倒だった。

「ごめん。松原が起きなくてさ」

「人のせいにしないで下さい！」

ちなみに、美沙は無意識に、人に会話が聞こえる可能性がある場面では雅史に敬語を使っている。

「いや、人のせいって……事実なんだからしょうがないだろ！？」

「嘘ですー！ 『今日は用事があるから先に帰る』 って瑞希先輩からメール貰ってますもん！」

ほら、と携帯の画面を見せる美沙。雅史がのぞき込むと、確かにその意を伝える文章があった。

「な……」

「遅刻の言い訳に関係ない人を使うなんて、先輩らしくないんじゃないですか！？ 最っ低！」

美沙は、朝よりは遅い早歩きで雅史を置いて行ってしまう。

「ま、待った！ それは誤解ー」

そこで、雅史はようやく

（そっ、そうか！ 松原の奴、起きてやがったなっ……！？）

つまり、昼休みに続いて、自分と美沙の仲を回復させるための計らいか、と理解したが、そのとき既に美沙は横断歩道を渡りきってちらりと雅史を睨んでいるところだった。

「ったく……」

この信号の長さを一年間の経験から熟知している雅史は、点滅する イージ・ブルーに走り出しかけたが、無理やり渡るつもりらしく速度を緩めないトラックを見て、やっぱり安全第一だな、と踏みとどまりかけた。

だが。

その横を、誰かが駆け足で通り過ぎた。

「ーおい！！？」

反射的に、雅史は飛び出していた。

トラックが僅かにスピードを緩めるが、間に合わない。更に悪いことに、予想外の速さで突っ込んでくるそれを見て、横断者である



少女は体を硬直させ、道路の真ん中で立ち止まってしまった。

「くっそおおおおおっ!!」

怒号一声、雅史はホームベースに突入するランナーのように跳躍した。少女の体をがむしゃらに掴み、庇いながらアスファルトを転がる。強い衝撃と痛みを感じながら、雅史はトラックがクラクションを鳴らしながら去って行く音を聞いた。

「ッハアツ、ハアツ、フウツ……はぁ……」

奇跡的にも、雅史にも少女にもさしたる怪我はなかったようだ。

「ちょ、ちよつと雅史大丈夫!？」

呆然と一部始終を眺めていた美沙はハッと我に帰り、雅史に駆け寄る。

「ああ、俺はなんとか……それより、えーっと、大丈夫か？」

雅史は、抱きかかえていた少女を見ようとアゴを引く。

「あ……」

「う……」

ひどく間近で、目が合った。

雅史は、波一つ立たない水面のように澄んだ少女の瞳を通して、間抜けな表情をしている自分を見た。少女は、倒れた際に引つ張られたらしく、胸元のリボンがほどけかけている。彼女の茶色がかつたボリウームのある髪が雅史の頬をくすぐるほど、二人は接近していた。

「あ、あの」

「ーわ、悪いっ!」

少女の言葉を制して、雅史は素早く少女ごと立ち上がり、二歩後退する。そこで初めて、背中に焼きつくような痛みを感じたが、声には出さない。

離れて見た少女は、美沙と同じ制服を着ていた。しかし顔に見覚えはなく、ということは一年生か、と雅史が考えていると、少女は突然頭を下げ、

「あ、危ないところを助けていただいて、どうもありがとうござい

ました！ このお礼は近日必ずしますので！」

聞き取れないほど早口で一方向的に告げると、髪や衣服の乱れも直さず逃げるように走り出した。

「あ、こら、待ちなさいよ！」

美沙の制止に、意味はなかった。

「……いいつて。無事ならそれで充分だ。お礼ももらえたしな」

雅史は特に気分を害した様子もなく、むしろ満足げに歩き出す。それが、逆に美沙の感情を逆なでした。

「よくないわよっ！ 何よ今の態度、あれで謝ったつも「美沙」

憤慨する美沙を、雅史は少し強めに名前を呼ぶことでたしなめる。

「俺は、これが正しいと思ったからやった。それだけだ。感謝を押し売りしたら、それこそ『正義の味方ごっこ』になっちまう。――頼む」

「……わかった、です。先輩」

どう見ても納得していない表情で、美沙はしぶしぶ頷いた。その後の帰路、二人の会話は全く弾まなかった。

夜。

「うおおお、しみる……っ！」

雅史は、布団の中で背中中の痛みと戦っていた。事故当時はさほど気にならなかったが、時間が経つにつれ次第に傷は盛んに自己主張を始めた。

「我慢しろ我慢……名誉の勲章みたいなもんだ」

助けることのできた少女を思い出す。時間としては一瞬だったが、間近で見つめ合った少女の容姿は、雅史の脳裏にしっかりと焼き付いていた。

「……しかも、地味にかわいかったな」

もう遭ったこともないだろうことを、ほんの少しだけ残念に思っ  
から、

「いかにいかに……寝よう」

雅史は、雑念を払うために掛け布団を被り、間もなく深い眠りについた。

一方その頃。

「もう……また無茶して！」

体育座りの姿勢でベッドに座る美沙は、やり場のない怒りを発散するように、羽毛布団をより一層強く抱き締めた。雅史の自らを省みない献身を嫌というほど見せつけられてきた美沙だが、今回は一歩間違えていれば死に直結していたような大事だ。募る不満もひとしおである。

「ホントもう、バカなんだから！ ……アンタのこと心配してる人のことも、ちゃんと考えなさいよね……」

美沙の呟きは、優しく抱かれた枕に吸い込まれた。

### 第三話

翌日、朝七時半ごろ。

「ーダメだ。負けましたっ！」

「そのようだな」

雅史は、将棋盤を挟んでクラスメイトの土方宗士ひじかた そうしと向き合っていた。場所は彼らの教室。宗士は、幽霊部員だらけの将棋部で、唯一まともに活動している。雅史は将棋部所属ではないが、宗士の熱意に打たれ、たった二人の朝練習をすることを了承したのだった。

「やつばここの角切りがマズかったか？」

「いや。その手はむしろ妙手だった。雅史ならではの着想で、形勢は一旦そちらに傾いたが、こちらの桂打ちの応手を誤ったな。取るのではなく避けるべきだった」

「はー、なるほどね……」

この決着で、雅史の戦績は八勝三十四敗。数字だけ見れば雅史の惨敗だが、宗士がアマ四段クラスの実力を持っていることを考えれば、むしろ立派な成績と言えよう。

「……しかし、今日の雅史は少し精彩に欠けるな。体調不良か？」

早指しで二局ほど終えたところで、宗士は中指で眼鏡の位置を直しながら表情を変えずに尋ねた。

「ん、いや特には。……ああ、強いて言えば少し背中が痛い」

昨日の名誉の負傷は、一昨日、いや長年の蓄積によって傷付いた体では、睡眠時間だけでは回復出来ない程度には重い傷だった。

「背中？」

「ちよつとこけてな」

「本当か？」

「……ああ。本当だ」

雅史は、自らの名誉を自慢するような真似はしなかった。彼は、褒められたいがために、尊敬されたいがために善行をしているわけ

ではないし、第一それが特別なことだとは考えていない。

「ーならいいが。偶には自愛しろ、雅史<sup>たま</sup>」

「へいへい。怪我には気をつける」

「そうではない」

「は？」

「……次は時間制限なしで指す。特に、守りに気を配れ」

「あ、ああ……わかった」

雅史は、何か釈然としないものを感じつつも、どうにも感情が読みにくい友人との、今日三度目の対局に集中し始めた。

「おはらつきよー」

「おは……え、なんだって？」

朝のホームルームが始まる五分前。クラスメイトの大半がいる教室で、朝練を終えた雅史と宗士が雑談に花を咲かせていると、瑞希が妙なテンションで現れた。

「なんかね、気に食わないんだよね、あゝゆゝの。マサシもそう思うでしょ？」

いつもの掴みどころのない雰囲気の中に怒気をにじませて、瑞希は雅史の隣の席に座る。

「いや、何が？」

「霊媒師みたいな？」

「みたいな？」

「昨日の昼からずっとやれ奥さんの魂はそこにいるとかあなたの肩を叩いてますとか私に囚われないでと言っていますとかさ。騙<sup>かた</sup>る方も騙る方だけど、騙される方も騙される方だよな」

ふん、と鼻息荒く言い放ち、瑞希はふて寝を始めた。

「ああ……そういえば、お通夜がどうか言ってたっけか」

そこでウソ臭い自称霊能力者にあったり、その後テレビで似たような番組を観たんだろ？と雅史は想像し、大筋正解だった。

「しかし、嫌なら観なきゃいいだろうに……」

「人間の心理は、ことのほか複雑らしい」

宗土は、両手を小さく広げて肩をすくめた。そこで、不意に雅史は手を打った。

「あ、そうだ。土方、今日誕生日なんだっけか？」

「む……否定しない」

宗土は、別段動揺した風もなく応じた。

「昼飯奢らせてくれ。いつも世話になってるからな」

「止せ、雅史。……それに、金銭面の援助は、食傷気味でな」

「ああ……そうだったな。悪い」

雅史は、宗土の家が結構な金持ちで、前に遊びに訪れた際に裏庭と称された森で迷子になったことを思い出した。

「何を言うか。その気持ちこそが至上の贈り物だ。感謝するぞ、雅史」

「……つたく、かなわないな、お前には」

雅史は頭を何度か掻いて、

「……………にゆう、それなんてフラグ？」

夢の中の瑞希が、意味もなく呟いた。

ふて寝した瑞希は、昼休みまで起きなかった。

「ん、ねむねむ……。あ、そういえばミサから聞いたんだけど、また人助けしたんだって？」

「ん？ ああ、まあな」

実のところ、この時点で雅史は昨日の救出劇に対する興味をほとんど失っていた。確かに最近の中でも危険度は一番高い人助けだったが、既に解決した以上、とりたて覚えておく必要がないからだ。ただ、あの自分達と同じ学校の生徒らしい少女が、無事に家に帰れたのかどうか唯一の気がかりだった。

「むくれてたぞ、ミサ」

「へ？なんでさ」

「直接会って聞いてみんさい」

「……ま、それもそうか」

というわけで、雅史はいつものようにコンビニのパンと牛乳を鞆から取り出して教室を出ようとする。

「あ、あのつ、ちょっとお尋ねしたいんですけど、いいですかっ！？」

どこか見覚えのある少女が、いきなり話しかけて来た。  
「えっと、何？」

時間が気にならなくもなかったが、無論雅史が邪険に対応しよう筈がない。

「このクラスに、わたしの……って、えっっ！！？」

目線が合った途端、少女は急に顔を赤らめて後退した。同時に、  
「あ。あの時の！」

雅史も、少女が件の事故未遂少女であることを理解した。

「はわわわ……ななな、なんでこんなところにいらっしやいますですか！？！？」

「いや、ここ俺のクラスだし。えっと、俺、稲村雅史」

「あ、わ、わたしは渚なぎさと申しますです！」

「と、とりあえず落ち着いてくれ……」

妙な敬語を使う渚に、返って雅史は平静さを取り戻した。

「は、はい……」

渚は、大げさに数回深呼吸。

「……じゃあ、渚ちゃん？あれから、怪我はなかった？」

「はい。念のため精密検査も受けましたが、お陰様で無傷でした」

「せいみ……？いやま、ならいいんだ。良かった」

「でも、事のあらましを話したら、お母様に叱られてしまいました。『路上で走るとは何事ですか』って」

「んん……？そこか、そこなのか？」

「つきましてはですね、お礼に我が家に招待したいのですが、今日の放課後など何かご予定は？」

「いや……特にないけど、それはいいよ。別に、礼が欲しくてやったわけじゃない」

雅史は、もらえると嬉しいけどな、とは照れくさいので言わなかった。だが、渚は雅史の謙虚な姿勢に感動したのか、胸の前で手を合わせて瞳を輝かせた。

「まあ！これが無償の愛というものですね！わたし、猛烈に感動いたしました！」

「い、いやだからそういうんじゃない、俺は自分のために、」

「なら、せめてこれをどうぞ！本当は兄のためにこしらえた物ですが、そちらはどうにでもなりますわ！」

「あ、う、うーん……ありがとう」

剣幕に圧され、雅史は渚が差し出した箱状の物を思わず受け取ってしまふ。

「それでは雅史様、また放課後にお会いしましょう！失礼いたしましたわ！」

言うなり、渚は疾風のごとく去っていった。

「……というか、また来るのか……」

一人残された雅史は、放課後を思うと嫌な予感を感じずにはいられなかった。



## 第四話

「あれ？ 珍しいわね、弁当なんて」

「へ？」

「へ？つて、それお弁当じゃないの？」

「ああ……そうだ。そうだよな」

「？」

美沙に指摘されて、雅史はようやく、渚がプレゼントしてくれた物の正体に気付いた。

（そうか、わざわざ昼休みに届けてくれたんだもんな。むしろ気付かない俺がどうかしてる）

雅史は、なんとなく反省したい気分になりながら、昨日と同じように美沙の隣に腰掛け、推定弁当のフタを開ける。そこには、バランスが考えられており、かつ見る者を楽しませてくれる色彩豊かな世界が広がっていた。雅史は思わず感嘆を漏らした。

「へえ……手間がかつてるな」

定型句を述べてから、雅史は用意されていた割り箸で食材をつまみ始める。全体の量はそれほど多くなかったが、買ったパンもあるので気にはならない。

「……ん？」

だが。

別の観点において、異変はすぐに訪れた。

卵焼きに殻が入っている。

ニンジンの皮がむけていない。

ミニハンバーグが生焼けである。

漬け物のキュウリが一つに繋がっている。

ご飯に含まれている水分が規定以上である。

うさぎりんごが返り血を浴びている。

「……雅史のお母さんが料理しない理由、わかった気がするわ」

「いや……まあ、そうなんだが」

実際には、この弁当を料理したのは渚だが、確かに雅史の母は似たようなスキルの持ち主である。

「でも、なんで今日に限って？」

「いや、色々、突然の事情が、あつてな」

真実を話すのははばかられたが、かと言って嘘をつくのは正しくないと考えた雅史は、慎重に言葉を選んで答えた。

「ふーん。……ねえ、それ美味しい？」

「……好意を馬鹿にしたくないから答えん」

「それ、間接的に答えてない？」

「……………」

美沙は、そこで僅かに顔を俯<sup>うつむ</sup>けた。

「も、もしよかつたらだけどさ。わたしが、その、お昼ご飯みたいな、作ってあげよつか？」

「え？」

突然の申し出に、雅史は首を捻る。

「べべべつに、深い意味じゃないわよっ！？　ただ、そう、成長期の男子はちゃんとした食事採らないと体に悪いとかあるじゃない！　どうせ兄貴とかお父さんの分作るついでだし！」

「あ、ああ……事情はまあ、わかった」

身を乗り出してきた美沙に、雅史は反射的にのけぞりながら答えた。妙に熱が入っている理由は定かではないが、毎日コンビニのパンで昼食を済ませている雅史にとって、魅力的な提案ではあった。

「で！？　どうなのよ？」

「いや……でも、俺は何も返せないぞ？」

「何言つてんの！？　アンタは、いつも無償で体張ってるんだから、これぐらいあつてもバチは当たらないわよ！」

「そ、そうかあ……？」

「そっなの！」

話しながらも、美沙が前に、雅史が後ろに上体を傾けていたせい

で、第三者から見ると美沙が雅史を襲っているかのようにだが、もちろん二人は気付いていない。

いつかのように、いやそのときよりずっと近くで、二人は見つめ合う。

「……………」

「……………わかった。それじゃ、頼む」

「わ、わかればいいのよ、わかればっ」

そこで美沙は、今更顔を見る間に赤らめて、バネのように雅史から遠ざかった。

## 第五話

（確かにありがたいんだが……いいのか？）

午後の授業が始まってからも、雅史は昼休みの一件が頭から離れなかった。あのときは半ば勢いに圧される形でOKしてしまったものの、冷静になってみると、どう考えても早計だった。

「食費も手間も一人分増えるわけだし……せめて金だけでも、いやそれは逆に失礼か……」

「おお迷える子羊よ、私に相談してみなしゃんせ」

延々と続く雅史の独り言に、瑞希は興味津々に目を輝かせて机ごと雅史に接近する。

「なんだその日本語。……いや。俺がどれだけ無力か、改めて感じてるところだ」

高校生になって、雅史は客観的に見ても心身共に立派に成長した。だが彼は、裏を返せばただそれだけで、例えばこんな小さくも心温まる好意のような、自発的に人を幸せにする術を持たない自分に思わず自嘲した。

「なーるーほーど。汝が悩みやがってることはわかりました」  
ぐい、と。

やけに不機嫌顔の瑞希は、雅史の体を無理やり自分に向けた。  
「な、なんだよ」

その異様な迫力に、雅史は、なんだか今日は脅かされっぱなしだな、と心の端で冷静に感じながら、瑞希の次の言葉を待った。

「問題です。1・一輪車、2・二輪車、3・三輪車、4・四輪車。  
あたしが乗れるのはどれでしょう」

「はあ？」

「どれでしょうー！」

「……まあ、普通に考えれば2と、3か？」瑞希の質問の意図を掴めぬまま、雅史は頭を数回掻いてから答えた。

「ぶー。正解は、どれにも乗れない、でした」

「え、マジで？」

「えらくマジです。だってさー、せっかく人として生まれてきたんだから、自分の足で歩かないと損じゃない？」

瑞希は、上履きを脱いだ足をぶらぶらさせる。

「むしろ移動時間がもったいない気がするんだが……」

「いいの！人間らしいことをしてる時間が、意味がない筈が……って脱線してる！」

それは置いといて、と瑞希は架空の箱を隅にどけるジェスチャー。「客観的に見て、あたしは天才です！」

瑞希は、惚れ惚れするほどハッキリと断言した。クラスの何人かが同時に吹き出す。

「……そうだな」

無論、クラスの中でその事実を一番よく知っている雅史が否定しよう筈もない。

「そんなあたしでもこのように、出来ないことはたくさんあるの！」

――マサシ、あなたは、自分が凡人だと思うなら、本当にやりたいことだけは出来るようになりなさい。さもないと、大切なことだけ失敗する」

「……………」

だから瑞希は苦手なんだ、と雅史は思った。

本当になんでもないことのように――今の俺に一番必要なことを、なんの躊躇いもなく、寸分の誤差もなく、一片の害意もなく、最小の容赦もなく、教えてくれるんだから、と。

「……わかったよ、マザー」

「わかればよろしいのです。って誰がマザーだ！あたしやアザーだ！」

「……しょーもねえオチつけんな！これだからお前は――」

真面目な空気はあつという間に消え去り、二人はしばしたわいもない口喧嘩に興じる。

最早言つまでもないが、一連の会話はやはり授業中に行われたもので、クラスメイト全員に筒抜けだった。

## 第六話

「失礼致します！雅史様をお迎えに参りましたわ！」

ホームルームが終了するや否や、渚は正面から堂々と雅史のクラスに乗り込んで来た。

（……慌てて対応すると盛大に誤解を抱かされそうだな）

ただでさえ、才色兼備の瑞希や、面倒見がよくかわいい美沙と仲のよい雅史は、学年問わず男子から殺意を持たれている節がある。ちなみに、美沙と瑞希に限らず、基本的には献身的で人当たりのよい雅史は、一部の女子の間で密かな人気があり、他の男子に比べれば頻繁に声をかけられているのだが、何故か雅史本人は自身に全く女子との関わりがないと思っている。彼の中で美沙は幼なじみ、瑞希は友達、と位置が決定づけられていることが一因である。

つまり、渚はある意味初めて異性として雅史に接近してきた存在、ということが出来る。

「あーっと、だな……」

雅史は周囲のざわめきや一際大きな驚きの声、それにくつつ笑っている瑞希を無視して、とりあえず渚を廊下に連れ出した。

「まずは、弁当ありがとう。美味かった」

胃に違和感を感じながら、なるべく真実に聞こえるよう注意しながら、雅史は礼を述べた。渚の顔がさあつと赤く、また笑顔になる。「い、いえ……私、料理はまだ修行中なのですが、喜んで頂けたなら幸いですわ」

「箱は洗って返すから」

「め、滅相もない！私がしたのはただの好意の押し付けですから、そのような後始末をして頂く訳には参りませんわ！」

「それだよ」

「え……？」

「俺も同じなんだ。別に、えーと、渚ちゃんだっけ？君に何かして

欲しいから助けた訳じゃない。いや、強いて言えば、『助かって欲しいから助けた』のかな。つまり、もう君は充分お礼をくれたんだから、これ以上返されたら、今度はこっちが返さないと正しくないというか、……なんというか」

渚の表情が見る間に弱々しくなったので、雅史はつい語尾を濁した。

（少し言い過ぎたか……？）

渚は、しばらく無言で俯いていた。が、雅史が、どうしたもんかと頭を二度掻いたところで、不意に意を決したように、上目遣いに雅史を見上げた。

「……でしたら。それを期待して家に招待しては、いけませんか？」

自信満々な常と打って変わって、捨てられた子猫のように儚げに彼女の年齢にしては起伏のある胸の前で組み合わせた指を震わせて。極寒の地にいるかのように、頬を仄かに朱に染めて。

「うっ……」

瞬間、雅史は渚の提案、それ以外の全ての事情を忘れてしまった。渚の直球は、見事に雅史の心臓にストライクバッターアウトスリーアウトゲームセットだった。



## 第七話

(……いかん。激しく乗せられてる気がするぞ)

気づけば、雅史は渚の部屋にいた。彼が覚えているのは、渚に誘われるままに黒塗りで長い胴体を持つ高級そうな車に乗り込むところまでで、車内での会話どころか、一体いつ降りたのかすら判然としていなかった。魔法でもかけられたみたいだ、とぼんやりとした頭で思う。

「……雅史様？ 紅茶が冷めますわよ」

「ん……？ あ、ああ」

紅茶？ と尋ね返そうになって、自分の右手がティーカップを握っていることに気づいた。気分を落ち着ける意味合いも兼ねて、一気に飲み干す。この状況がそうさせているのか、これまで経験した中で一番美味しい飲み物だと感じた。

「……うまいな。渚は、いつもこんなの飲んでるのか？」

「！ は、はい……雅史様がお望みなら、いつでもいくらでも用意させますわ」

洋風の部屋なのに、何故か雅史と渚は座布団の上に座っている。

渚に至っては正座している。雅史がそれなりに冷静で、もつと周囲を見渡す余裕があったなら、巨大な王将の駒や木彫りの熊を発見することが出来ただろう。いずれにせよ、女の子の部屋に相応しい物とは言い難い代物だが、これら和風の物は渚の兄の物だった。

(それはいいんだが……いや、よくないんだが。なんだ、何で俺はこんなところにいるんだ？)

今更のように、雅史はカップからたちこめる僅かな煙と、その向こうにいる気高くも未完成な原石を思わせる美しさを持つ渚をぼんやり眺めながら、過去を回想する。

始めは、ただの人助けだった。いつものように、自分が正しいと思ったことをした結果、渚を助けることが出来た。それはいい。

だが、問題なのはその後。お返しとして得た諸々の行為は、彼の基準において測るならば、彼には身に余るものだった。もっとも、渚にとって雅史は命の恩人で、この程度では全然足りないと思っ  
ているのだが。

（だから、もういいって断ったんだよな。断った…… 善なのに）

これは なんだろう。つまり、損得勘定を抜きに、彼女と一緒にいたい理由があつたのだろうか。だとするなら、それは、

「でも、本当に私は幸運でしたわ」

「え？」

渚は、空になったカップを静かに受け皿に置く。

「雅史様がいなければ、私は間違いなく…… その、死んでいましたから」

「…… かも、しれないな」

「でも、逆もまた然りですわ」

「…… え？」

「差し支えなければ教えて頂きたいですわね。雅史様。あなたはどうして、見知らぬ他人のために、そこまで必死になれるのですか？」

それは、渚からすれば当然の疑問だった。

「それ、は……………」

紅茶を飲み干した直後だというのに、雅史は渴きを感じて喉を鳴らした。

彼が、人を助ける理由。

「俺は、ただ間違ってるのが嫌いなだけで…… 正しいと思うことを、やっ  
てるだけだ」

だが、その思想は。

一体、どこを起源として生まれたものなのか ？

「はあ。何故そう思うように？」

「なんで、って……………」

小さい頃から、一緒だったヤツがいて。

他人事を自分のことのように心配してくれて、一喜一憂してくれて。

しっかりしてるくせに、変なところで危なっかしくて。ただケンカばかりしていた俺は、その生き方に憧れて。せめてそいっだけは守れるように、正しくあるうと思って

「ああ。なんでこんな大事なこと、忘れてたんだ！」

「ま、雅史様？ ご用事ですか？」

雅史が突然叫んだかと思うと立ち上がったので、渚は目を丸くした。

「ごめんな。……ずっと忘れてた、大切な約束なんだ」

もはや渚に振り返ることもなく、雅史は部屋を出ようとする。

「で、でしたらお送りしますわ！」

雅史がどこか遠くへ行ってしまいう気がして、渚は慌てて彼の袖を掴んで引き止めた。

## 第八話

「……瑞希先輩？ ホントに来るんですか？」

「んーとね、……多分？」

瑞希と美沙は、校門で雅史を待っていた。

「えっと、そもそもまさ……松原（雅史の名字）先輩は、どこへ行つたんですか？」

「魔女？ いや、むしろ白馬の王子様に助けられた姫様のところか  
にや？」

「???？」

空は、仄かな茜色に彩られている。美沙は、瑞希の言葉にしばし  
首を捻つてから、先日的一件を思い出した。

「……そういえば、あの時の子、ウチの制服だったような。……も  
しかして、今日のお昼ご飯が珍しくお弁当だったのもそのせい……  
……？」

女のカンなのかなんなのか、美沙はやけに高速で思考を展開させ、  
真実を一つずつ突き止めていく。だが、妄想は更に悪い方向へ悪い  
方向へと進み、美沙の顔は次第にさあつと青ざめて行く。

「だーかーらー、大丈夫だって」

「ふあっ!？」

不意に。

瑞希は、不安げな美沙を包み込むように後ろから抱き締めた。

「な、何するんですか瑞希先輩!？」

「マサシがああなった理由。ミサ、なんでか知ってる？」  
にこやかな笑顔で、しかし口調は真剣に瑞希は問う。

「……うすうすとは」

雅史と美沙、随分と差がついてしまった二人の手の大きさ。  
守る者と守られる者の立場が逆転した、いつかの日。

「……あたしのせい、ですよね。あたしが頼りないから、雅史は自

分のことが見えなくなっちゃって、それで、」

「違うよ」

抱擁する力が、ほんの少し強くなる。

「え……？」

「ミサのせい、じゃなくて、おかげ。アイツ、きっといい男になるよ」

美沙の耳元に、初めて自らの感情を顕あらわにするように、こっそりと瑞希は囁いた。

その温かさが。まるで母親のようだ、と美沙は思った。

「……はい。それは、あたしもそう思います」 美沙の返答に、瑞希は楽しそうに、今はまだチェリーボーイだけにゃー、と混ぜて返した。

美沙は、自分の中の何かを確かめるように、一度小さく強く頷いて、微笑んだ。

それからほんの数分後。

校門に、学校には似つかわしくない黒塗りの高級車が停止した。

「え？」

「それじゃ、後は頑張れ！ 健闘を祈る！」

言つや否や、瑞希は脱兎の如く校舎に逃走……すると見せかけて、美沙に気づかれないように、建物の影に隠れた。

「ふえ？ あ、あの瑞希先輩……？」

困惑する美沙や下校する生徒をよそに、車のドアが自動で開き、

「美沙！」

「雅史……？」

昔から好きだった幼なじみが、姿を現した。

数分前、学校へ向かう車内。

「……ご用件とは、何か聞いても宜しいですか？」

後部座席に座る渚は、隣で引き締まった顔で移り行く景色を眺

めている雅史に尋ねた。

「ん、……忘れ物を取りに行くんだ」

「忘れ物、ですか？」

「ああ。六年ぐらい、ずっと思い出せなかった自分がどうかしてる。往復ビンタでも釣り合わないぐらい、大事な忘れ物なんだ」

「……………」

渚は、ぎゅつと唇を噛み締めて、出かかった言葉を飲み込む。一方、雅史はといえば、

（勢いで立ち上がったのはいいけど……どうするか。何を話せば、いいんだ？）

年月を経ても風化することのなかった様々な想いが、新たな息吹きを吹き込まれて彼の脳内を駆け巡る。暴れ馬にも似たソレを乗りこなすには、ハッキリとした指標が必要だった。

“……マサシ。あなたは、自分が凡人だと思うなら……”

「……たく。つくづくお前は天才だよ、松原」

雅史は、気まぐれながらも頼もしい無二の友人の、まるでこの展開を見越していたかのような忠告を思い出した。

そうだ。俺に出来ることは少ない。だけどそれは、自他共に天才と認めるアイツだってそうなんだ。恥じる方がどうかしてる。

大切なのは。

なら、一体何だけは失敗したくないと、自分が思うのか。

「……あの、雅史様！」

「ん？」

信号待ちで、車が停まる。雅史が目を向けると、渚が真摯に彼を見据えていた。

「……どうやら、もうこのような機会には恵まれないようですから、先に言わせて頂きますわ」

すう、と渚は息を吸い込む。

（「ーそうだよな。やっぱり、そうなんだ」

皮肉なことに「ー」方向は違えど、渚と同じ決意を固めていた雅史は、次に彼女が何を言うかを、いち早く察した。だからこそ、しっかりと真正面から、彼女と向き合う。胸を張って美沙の隣にいられる、正しい自分であるために。

「私は、雅史様が大好きです！ふつつか者ですが、宜しければお付き合いです！」「

「「ー」ごめん。俺はもう「ー」心に決めた、ヤツがいるんだ」

渚の告白にも雅史の返答にも、一片たりとも虚偽はなく。

一つの恋の終わりと共に、車は目的地に到着した。

## 第八話（後書き）

せっかくの日曜日なので、二話書いてみました。いつの間にかそろそろクライマックスです。よろしければ、もう少しだけお付き合いください。



## 第九話

「美沙。――俺はお前に、言わなきゃいけないことがある」

「な、なによ……」

雅史の、まるで決闘状を叩き付ける剣士の如き気迫に、美沙は困惑する。

「……………」

「……………」

「……美沙」

「う、うん」

「俺はお前に、言わなきゃいけないことがある」

「それはさっき聞いたわよ！」

校門前で現在進行形で行われているサプライズに聞き耳を立てていた野次馬のみなさんは、盛大にずっこけた。

「そ、そうだったっけか？」

「……はあ。ホントなんなのよ。もしかして金欠？あ、だからお弁当だったの？」

「い、いや違う！確かに金はないけど！」

「じゃーなによ！」

（ええい……心は決まってる、決まってるんだ。あとは、そう、言葉の問題だ）

少し冷静になった雅史は、先の渚の告白を参考にしようかとも考えたが、渚が自分に抱いてくれた感情は自分が美沙に抱いているものとは違う気がしたし、第一渚と美沙、双方に対して失礼――正しくない結論づけ、やめた。彼女への誓いを定めてから、その原点を忘れるほど体に馴染んだ唯一の誇りを、よりによって今失うわけにはいかない。

校門近くに咲き誇る桜が、穏やかな風に吹かれて花を散らす。ほんの一瞬、雅史は美沙の姿をおぼろげにしか捉えられなくなる。

不意に、その輪郭が幼い日の彼女と重なる。

まだ、雅史が彼女に肉体的にも及ばなかった時代。勝てもしないのに喧嘩を挑んでは負ける彼を助けたのは、いつも彼女だった。一見しても、他の少女とさして変わらぬ華奢な体つき。一体あの中どこに、あんなにも頼もしい力が隠されていたのか。

だが、地面に倒れていた彼だけは知っていた。

奮然と立ちはだかる彼女の足は。いつだって、小さく震えていたことを。

つまるところ。彼女が勝っていたのは、体ではなくー

「ー美沙！俺は、」

守りたいと願ったものために、恐怖に怯まず足を踏み出した、その心ー

「ーお前が大好きだっ！！　ずっとずっと守らせてくれ！！！」

「まー」

雅史渾身の告白に吹き飛ばされるように、桜吹雪が舞い上がる。クリアーになった視界の先には、顔をくしゃくしゃに歪めた幼なじみの姿があった。

「雅史いいっ！！」

感極まった美沙は、雅史の胸に体ごと飛び込むように駆け寄り、額をつける。雅史は少し、いや大分迷ってから、優しく手を回した。一秒が永遠になったような祝福のときを、

「……バカ」

「へ？」

雅史にとつて予想外の言葉が破った。

雅史にだけ聞こえる声量で、吐息の気配を感じられるほど近くで、美沙は続ける。

「ずっと心配してたんだからね。明日になったら、あんたが、どこかで野垂れ死んでるんじゃないか、って」

「野垂れ死ぬって……野良犬か、俺は」

「……あんたがどうかで、助けた誰かに籠絡されてるんじゃないかって」

「……………」

若干心当たりがあつたので、雅史は後ろめたさを感じながら黙った。

「……こんな大勢の前で言ったんだから、もう取り消し出来ないわよ？」

「……いや。大勢の前じゃなくなつて、取り消すもんか。そんな正しくないこと——美沙は一度だって、しなかったからな」

「……バカ」

要するに、雅史にとつての正しさの起源とは。ずっと側にいた大切な幼なじみの、今も変わらぬ優しさと勇気なのだった。

「……ところで。まだ、返事もらってないんだけど」

「……しなくても分かるでしょ？」

「……でも、確信がないというか、こういうのは痛み分けにしかないと後で後悔しそうというか、なんというか」

お互い顔を真っ赤にして、間近でじつとりとにらみ合う。

先に折れたのは、美沙だった。

「……もう。しょうがないわね！」

美沙は、小さく息を吸って、——満開の桜が色褪せて見えるほど、文句の付けようのない笑顔で、

「――あたしも大好きだよ。雅史」

二人の唇が、運命のように重なった。

## 第九話（後書き）

気づけば明日はクリスマス。ちょうどいいタイミングで終わりそうです。

## エピローグ

劇的な告白から一週間が過ぎた。

早朝、まだ活動的な運動部の生徒しか登校しないような時刻に、人のまばらな通学路を並んで歩く男子と女子。

「あー……眠い」

「当たり前なことじゃないでよ！ あたしだって眠いんだから……ふわぁ」

雅史と美沙だ。ついこの前までは瑞希と登校していた美沙だったが、宋士の朝練を手伝う雅史に時間を合わせるようになっていた。周りに会話を聞かれる心配も少ないので、敬語ではない。

「辛くないのか？」

「ふえ？ な、何がよ？」

二度目の欠伸と闘っていた美沙は、突然の雅史の問いに眉をひそめた。

「いや、時間の話。大分早くなっただろ？」

「ああ……そゆこと」

あの一件の後、雅史は美沙に対して何かと気を遣うようになっていた。だが、生活力に関しては美沙の方が勝っているのは明らかで、雅史の杞憂に過ぎない心配がほとんどなのだが、

（……散々待たせたんだもん。ちよつとぐらい、ワガママ言っただけいいわよね）

その心遣いが嬉しいので、美沙は度重なる彼の好意をありがたく受け取ることになっていた。端からだただのパシリにしか見えないこともない。

「俺のために無理すんなよ？ 別に、昼でも放課後でも会えるんだから」

「……あんたねえ」

しかし、こうも迂闊に乙女心を逆なでられる機会が多いと、怒鳴

りたくなるのが人情である。

「俺のせいで美沙が傷付くのは、もう御免だからな」

「ーい、いいのよっ！ あたしが好きでやってるんだから！」

……怒鳴るには怒鳴ったが、顔を怒り以外の理由で真っ赤に染めていては、効果は薄かった。

「ーこれで俺の七連勝だ」

「ぐ……最近厳しいな、土方」

「そうか？その逆かも知れんぞ」

ここ何日か、雅史は将棋の成績がこれまでの勝率をかなり下回っていた。宋土はとぼけたものの、明らかに彼は本気を出していた。

「さ、次だ。雅史、お前が腑抜けになつていないことを証明したくば、言葉ではなく盤面で示せ」

「……なあ。お前、なんか怒ってないか？」

ピタリ、と宋土の駒を持つ手が止まる。

「ははは。可笑しなことを言うな、雅史。何故俺が憤怒せねばならんのだ？」

「あはは……だよな、悪い。俺の勘違いみたいだ」

「ーああ。実の妹がとある男に見事にフられ、あまつさえ目の前で他の女と接吻されたからと言って、心底腸が煮えくり返るような俺ではないよ」

「え……うええええええええっ！？」

土方渚の兄、土方宋土は、あくまで無表情に、持ち駒の飛車を、鬼神の如き迫力を以て、親の敵を討ち取るように、盤上に叩き付け

た。

「で？で？ぶっちゃけどこまでいったのかね？」

いつもの授業中、いつにも増して瑞希はハイテンションだ。

「だーから、何もないっつーの！」

定期テストが近いので授業に集中したい雅史だったが、これではどうしようもない。

「ホントにー？」

「お前に嘘つく気はないっつーの。……なんていうか、世話になっ  
たしな」

一番肝心な場面で迷いを断ち切ってくれた瑞希に、雅史は心から  
感謝していた。

「……ふうん」

雅史の答えに何を感じたのか、瑞希は突然大人しくなった。細め  
た彼女の目から、感情は読み取れない。

「ど、どした」

「……まいいや。寝る」

言うや否や、机に突っ伏す瑞希。

「……なんなんだ」

雅史はため息をひとつついていたので、

「…………せに」

瑞希が小さく呟いた台詞には、気付かなかった。

放課後になった。

「遅いです！」

「お前が早いんだ！今回はホームルーム終わってすぐすっ飛んで来  
たんだぞ！」

「あれー、言い訳ですかー？」

「ぐっ……分かった、今回は俺が悪かった。だがしかし、明日は覚  
えてろよ！」



「はいはい。いいから早く帰りましょー」

雅史の宣言を軽く流して、美沙はさっさと歩き出す。

「ったく……」

その姿を追おうとしてーそろそろ散ってしまう桜の花びらに乗せた風が、不意に彼女の髪をなびかせる。

「ーーー」

それは、本当に一瞬だったけれど。

得たものの美しさと大切さを再確認するには、十分な時間だった。

雅史がついてこないことによりやく気付いた美沙は、振り返り、満面の笑顔をたたえて、呼びかける。

「何してんの雅史！置いてくわよー！？」

「ああー待ってくれ、すぐ行くから！」

そうして雅史は、桜の舞い散るその道を、ずっと共にあると決めた最愛の幼なじみへと向かって、しっかりと前を見据えて走り始めた。

## エピソード（後書き）

というわけで完結です。ここまでのお付き合いありがとうございました。機会があれば、また甘々なお話か、学園力オス第二弾でお会いしましょう！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2466d/>

---

これが俺の生きる道！

2010年10月28日07時44分発行